

日本発生生物学会50年の挑戦

実験形態学会 代表:市川衞、1939創立

明

期

日本発生学協会 代表:佐藤忠雄 (実験形態学誌,1942~) (Embryologia,1950~)

> 発生学談話会(東京) 代表:丘英通

1963 連合体結成の試み

日本発生生物学会設立の提唱 1967.5.21

日本発生生物学会発足

1968.5.18 13時~設立総会@立教大学5号館 大会委員長:林雄次郎、議長:江口吾朗

Embryologia (10号まで)から Development, Growth and Differentiation (11号~)へ 和文誌:発生生物学誌(旧実験形態学誌)

1968. 5.19 第1回大会@立教大学 大会長:林雄次郎、2会場47演題

8月に会長および運営委員選挙 会員数444名 会長:団勝磨、運営委員14名(平均42才) 年会費3000円 (和、欧文誌配布) 1600円(和、欧文誌どちらか一誌) インホメーション・サーキュラー発行(1968.10~)



1969

第2回大会(金沢、木戸哲二)

大学立法に関する反対声明

1970

第3回大阪大会(天沼昭) (植物生理学会と合同) DGD編集主幹:椙山正雄

和文単行本発刊 「発生における制御」 その後第7集(1977)まで

発生生物学誌廃刊へ 会費一律4500円に



第4回大会(福岡、川上泉)

1972 1973

第5回大会(東京、古谷雅樹)

第6回大会(京都、岡田節人) 2代会長:椙山正雄

ISDBシドニー大会 1974

1975

第7回大会(名古屋、椙山正雄) DGD編集主幹:岡田節人

日仏発生生物学会議(東京)

第8回大会(仙台、樋渡宏一) DGD基金を募る(一口1000円),556500円集まる DGDの規定変更

英、仏、独文から、英文とする(仏、独も許容) 会費値上げ 4500円に

1976

第9回大会(大阪、岡田善雄)

1977

第10回大会(東京、山名清隆·加藤淑裕) 3代会長: 団勝磨

学会費6000円に

10年目の反省(取りまとめ:江口吾朗) 会員から意見取りまとめ、運営委員会へ答申、 総会で報告(DGDの刊行方法の工夫など)

第11回大会(三島、黒田行昭) (一会場で開催)

1979

DGDの発行1000部超える

第12回大会(札幌、原田市太郎) 4代会長:岡田節人

1980

学会事務センターへ業務委託

第13回大会(広島、菅野義信)

1981

ISDBバーゼル大会 第14回大会(京都、藤田哲也)

1982

DGD基金のお願い、年会費8000円に

第15回大会(東京、平本幸男) DGD編集主幹:山名清隆

岡田節人国際発生生物学会(ISDB) 6代会長に就任

1983

成茂より寄付金(旅費補助に)

The Jean and Katsuma Dan fellowhip開始

第16回大会(松山、石川優) 5代会長:加藤淑裕

1984 1985

第17回大会(熊本、藤本十四秋)

第18回大会(名古屋、大西英爾)

-般発表を全てポスターに(126演題) (ワークショップ、シンポジウム、特別講演以外)

ISDB Los Angels大会 参加者900名の内日本人70名

1986

会員数756名

DGDの海外頒布をAcademic Pressに委託

為替レートの為依然赤字

DGDマーク入りテレホンカード販売

第19回大会(筑波、渡辺浩)

1987

国際発生シンポジウム@岡崎

Regulation Mechanisms of Developmental Process 第20回大会(京都、米田満樹)

6代会長:安増郁夫 DGD編集主幹:米田満樹

学生会員制度(8000円)、通常会員10000円へ

1988

第21回大会(山形、及川胤昭) 10年目の反省会@山形大会(司会:佐藤矩行)

60名参加

大問題や不満はない、植物に関する発表が減った DGDが海外で900部頒布



第22回大会(札幌、片桐千明)

1990

1989

DGDへの大会要旨の掲載廃止

第23回大会(広島、天野実) DGD編集主幹: 片桐千明

第1回加藤淑裕賞

DGD大型化A4に ISDB Utrecht大会

団生物科学国際基金(留学支援)

成茂基金(研究助成)

第24回大会(東京、安増郁夫) 7代会長:江口吾朗

1992

DGD別刷り無料廃止 DGDに関するアンケート

(会費値上げ?、学会から分離?)

第25回大会(横浜、浅島誠)

620名参加、2会場

1993

ISDB Vienna大会 科研費複合領域に「発生生物学」

1994

会員数1018名

第27回大会(仙台、井出宏之) DGD編集主幹:星元紀

第26回大会(福岡、山名清隆)

DGDをBlackwellに委ねる(編集幹事から出版社へ) 最も引用している雑誌はDev. Biol.、DGDは3位

第28回大会(名古屋、藤沢肇) 8代会長:岡田益吉

ISDBの傘下に入る(それまでは個人でISDBに入会) MODがISDBの機関誌に

DGDのBlackwell委託により余剰金 第29回大会(京都、佐藤矩行)

3会場参加者614名 ベストロ頭、ポスター発表賞

1997

会員数1326名 DGDテレホンカード完売 ISDB Snowbird大会

10年目の反省へ向けて(Circular No.88)

第30回大会(筑波、平林民雄) DGD編集主幹:嶋田拓

1998

会員数1398名

第31回大会(熊本、安部眞一)

31回熊本大会で10年目の反省

32回大会(神戸、団まりな) HPで演題受付、OHPでの発表、3会場(テレビ配信) 9代会長:竹市雅俊 DGDオンライン化

2000

会員数1519名

第33回大会(高知、川村和夫)

年会費クレジット決済 CDB誕生、20名チームリーダー募集

14th International Congress of Developmental Biology



July8(Sun)-12(Thu), 2001

Kyoto, JAPAN

第34回大会(京都、竹市雅俊) ISDBと合同、1498名参加(内400名外国人) ーキュラー100号、印刷配布終了、HPへ



DGD編集主幹:浅島誠

DGDインパクトファクター1.73



第35回大会(横浜、八杉貞雄) 細胞生物学と合同年会 保育室を設ける

2003 会員数1515名

第36回大会(札幌、若原正己) 10代会長:浅島誠

DGD編集主幹:八杉貞雄 男女共同参画学協会連絡会に加入

第37回大会(名古屋、黒岩厚)

取得、会員名簿管理

DGDの電子投稿受付開始 ISDBへ会費納入

2005



第38回大会(仙台、仲村春和) 725名参加、特別講演2、シンポジウム6、 ワークショップ4、オーラル演題110、ポスター217、 ランチョン5、展示25

APDBNワーキンググループ (CDB内事務局) 年会、DGDをアジア・オセアニアに解放 ISDB Sydney大会、APDBNシンポジウム 学会支援機構に会員情報管理など委託

2006

第39回大会(広島、吉里勝利) ポスタータイトル、アブストラクトを英語化 大会発表時の英語化に関するアンケート

2007

第40回大会(福岡、山村研一) 細胞生物学会と合同、参加者1340名 英語化に踏み出す。男女共同参画シンポ 11代会長:相澤慎一

DGD編集主幹:仲村春和 秋季シンポジウム(岡崎)(対象:若手PI、準PI) 10年目の見直し(HPに掲載)

2008

第41回大会(徳島、野地澄晴) ISDBと共催、発表は英語

学生会員年会費3000円に(学会誌配布無し) 学会事務局(桃津恵子)管理へ一元化 国際広報担当(ダグラスシップ)

第1回サマースクール(乗鞍)(対象:院生・若手PD)

日仏合同年会(Giens) (参加者約300名、日本から76名) 理科教員研修開始

会計監査法人の導入

HPリニューアル DGD Most Cited, Most Downloaded賞開設 2009

DGDインパクトファクター2を超える

第42回大会(新潟、濱口哲) ポスター賞

学会運営に関する懇談会 会員名簿電子化 ISDB Edinburgh大会 第2回秋季シンポジウム(三島)

2010

学会声明

第2回日仏合同年会(Paris)

第43回大会(京都、上村匡) APDBN共催、Excellent presentation award



ISD/JSDB joint meeting (Nara)

(八王子)

2011 日独合同大会(Dresden)

第2回夏季シンポジウム

第44回大会(沖縄、政井一郎) 大会参加旅費支援(東北地区) 12代会長:阿形清和

第3回秋季シンポジウム(岡崎) 2012

日英合同大会(Warwick) 第45回大会(神戸、高橋淑子) 細胞生物と合同、Young Awards DGD 編集長賞、Wiley-Blackwell賞

第3回夏季シンポジウム(下田) 2013

会員数1306名 第46回大会(松江、松崎貴) ISDB Cancun大会

APDBN meeting @Taipei

第4回秋季シンポジウム(神戸) 2014

第47回大会(名古屋、日比正彦) iWAB. Poster Awards

第4回夏季シンポジウム(浅虫) 日西合同年会(Madrid) DGD impact factor 2.2

2015 第48回大会(つくば、和田洋) APDBNからも参加費徴収へ、Poster Awards 13代会長:上野直人

DGD冊子対廃止、Impact factor 2.42



APDBN meeting in 西安 岡田基金(旅費支援)

2016 会員数1188名

大会参加費返金 FaceBook アカウント取得 東京でJSDB Special symposium

第49回大会(熊本、中村輝、震災により中止)

三島で臨時49回総会(三島) 第5回秋季シンポジウム(三島)

第2回日独合同大会(Kiel) 50周年記念事業(科学博物館企画展)



第50回大会(東京、上野直人)

10年目の見直し ISDB Singapore大会 夏季シンポジウム(三﨑)

発生生物学誌 第22号 発生生物学誌 木英生生物学会假立配合環境会開展要計 植物水ルモンの作用と細胞分化 将 島 直 参 … 27 日本売生生労予会第1四大会議終契督 34

発生生物学会設 立、第一回大会に 関して 発生生物学誌 (旧:実験形態学 Information Circular 55 (1986.12) に も関する記事があ る。

巻 頭 戸

9年の泰これまでの商生率の諸団体を接合し、さめた総称等。医学の誘張分野を併せてお本稿 生物学命が振識された。これを接合に関西展先生だよって結論された間接生生で勢つが抗て と実験形態学誌と他職を増先生が初かから現在まで鉄譜してとられたエムプリオロギャ の同語

日本発生生物学会第1回大会 The 1st Mosting of the Japaneuse Society of Developmental Biologists

大会記事

が進星された。 日一般高興終了後午後6時30分から、同じ館2階の大学院演習室で素率ターブの会がも ニートリティニやので、各研究機関の代表者会議のようになったが、夏の館談会のことや

にとざまったので、各研究機関の代表者金額のようになったが、夏の館図台ロことや を学会運営にも充分反映させたいなどのことが綴し合われた。この日が類から期足が 前30分溢者には哲学グループの会を終り、すべての金貫の足音が期の中に関えなって

書の書き、QUINTER ATURE の記載を呼い、「日本のたれる主意を開発的である場合のは私人の「中間を あたし、その他の形式には、日本の表もで、「日本のたれる」を開発的である場合のは私人の「中間を まましてきない。

「日本のまま」というない。

「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」というない。
「日本のまま」といるない。
「日本のまま」といるないるない。
「日本のまま」といるないるない。
「日本のまま」といるないるないるない。

マンニーハン。 ア、東立単確容員会を旅け具体的な問題処理と当る。 7) 単語委員会成立までに必要な競事要を検討し処理するために、小人数のワーキング・ダループを他用 たる 連続の合すによって大型をあるでよりできる。

17、海豚が高点なさせたのが皮膚を発酵用、危険するために、か人気のワーセンデ・デループを包止 たちんとする発生や管理は同かり、研究を使用する。 超り振光を含しては固する。 2 建立物機能の自然生での子類的な で・サーマンデ・デルーで発生し、 は、対象の表現を表現したが可能を表現した。対象の含め、自然の含めたのである。 2 建立物機能の自然生での子類的な で・サーマンデ・デルーで表現し、対象の含め高級含を認知を参与とし、次の方々に影響することとと 5、新い合きな主要が予測を必要されて、

日本発生生物学会発足 / 0 年目の反省について

日本発生生物学会では、10年目どとに学会活動の反省を行なりこととする旨を会

(1一) 温度寮員会の改員について の提出は直状実行下移したいと考えます。そのためは漢室委員選等銀行顧用の 改正を、11979年度大会館会に提案します。改正の内容は、選管寮員14名中の5名 については、会長が必要と認めた場合は会長の責任において、この設訂の内容にあう べく長期間の分かに合かまできるようでする。というとであります。この改正は、 学会選索の原則上からは前る契約のあるもので、表別を免験をはらんだものであります。 第24、発生地等やなっていた当まを発展と支化が会費をよれている分野ので呼ばれ によっためには、よむを得ない処置であり、思いきつて実行に暮そうというのが子会

応するかかには、止りを得ない処理であり、思いまつて実行に毎そうというのか学会 超常最合の生じませるます。 (ユー2) 研究支援の侵援だついて 間味に学命のフレッドはよる小場合を行立りことは、大いに輩ましい。しかし持今 は「全命が多すまる」という事と一部にあることであり、東に有効なものを同様でき よう 分類でを生むかい。然当つては年光分余と、この目の一会会の機会として完分利 用できるようが係例のに設と参加さないたいと考えます。 (ユー3) 学会の母を全部大人でいる。 現実についての研究者の中で、本会会様に所属しておっちゃないとと は事実です。これのテラのかが、これで、会会が満った時のパンテレットを作製 し、表点、会員名の影響になって利用できるようドしたいと考えています。 (エー4) なきないますだいという。

2 、中合が中心となるか、成社支援して推進すべき事項 提集、当学会は学問中のものの交換の場としてのみ存在している相向があり、とい に知言されたような事項についてはいした場間ができったよりに思われます。10年 以前はとなった、現生生物学の取状の接種と、多様性を考えるとき、学問の組織、体 側についても何ぞるとしては無関である時でありますか。10年 にかし、とい に対応されている内容は、当然のことをから一切にしてあるものではありません。分 长としては今後、これらの事項を大分に震災して、機関的に機合かること、たわらの事項を大分に震災して、機関的に機合かること、たわらの事項を大分に震災して、機関的に機合かることもから、 いと考えますので、委員・会員合位の適切なアドバイスと何支援を切室します。

10 月20日村で、金鑑・田川盛で写真体会員への新学会教立たついて記載水本のも検討状義。
 9月12日村で、月銀石まとり下省、600名2半線電路」の再結人水電気発売。
 3月20日村で、北京をこう関係対策を会入への検討状義法。
 3月20日十つ北京人資本に対する北京金融等の展示が成立サーキング・ダループで包なり、
 9月20日で、海線製造会で作なる北京金融等の展案作成セサーキング・ダループで包なり。

製造の金の製造した。予算して選挙ですであることができょうにはある金融等等的

・ お見込の機能の上が会す

・ お見込の機能の上が会す

・ おりませる。

・ おりませる。

・ おりませる。

・ はりませる。

・ はりま された。 会長は第一次選挙で3名の保護者(問題書・市川衛・開発版人―アルファベット等)が失まり、第二次3 等(8月3日登別)で決定されることになった。これちの選挙時、東京教育大学での動争がはげしくなり。 周週間所第の会員と経済を入る日本とない。実際(認称に他的できたかったというような意味とはこ

7) 第180大会は長行大学で、1998年5月3日11・9.2。 「女大・男・皇人」では、「女人」では「女人」では「女人」では「女人」では、「女人」では、「女人」では、「女人」ない、「女人」」では、「女人」」では、「女人」ない、「女人」」」では、「女人」」では、「女人」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」」では、「女人」」」では、「女人」」」では、「女人」」」」」」は、「女人」」」では、「女人」」」は、「女人」」」」は、「女人」」」は、「女人」」」は、「女人」」」は、「女人」」」は、

日本発生生物学会の発足について

										70	RO4			[H]	
	天	野		実		JH .	£		族		0	26	Æ		88
	Q S	till .	96	10.0		ж	H :	4.9	跞			奥	村	滑	失
	*	927	*	拙		ホ	94	新	=			4	奶	55	35
0	50		B#	200		98	BE.	英	利			盤	黟	t	部
0	ш	Ŀ	供	16		A.	Ħ	87	挹		0	佐	35	25	雄
0	红		T	36		果	佳		A			釈	野	+	荿
	篠.	83	寮	-		軟	95	故二				鉄	郑	左为	
	25	井		Rit.		W	All	文	夫		0	器	LL:	Ξ	堆
0	蘖	田	10	包	0	恢	器	塘	男			高 .	非 "	傑	失
0	Ħ	유	58	48		九	Ш	I.	作		0	高	82	赛 ·	_
	林		-	85	0	FB	F1	38	堆		0	76	89	盤	\equiv
	林		25	2		Ξ	推	92	鬖			故	祭		炸
0	*		加水	85		Æ	材		赦		0	Ħ	W.		牌
	彼	107	恋	28		Ħ	£		忻		0	41	Ħ	郁	夹
0	22	田	声太	85		材	Æ:	無	22,		0	177	19	E	*
	長	8	90	=		4	Ħ		推			47	内	庄	Ł
	25	#	超	85		178	材	59	22		0	坪		曲	22
	В.	×	飯	施		海野	59	泰	堆		0	山	8	28	縣
	10	л	81	25	0	政	B	秀:	実			89	H	友	道:
0	市	All		袋		fc		英	洒		0	80	St.	裹	25
	石	93	赛	老		FI.	EE.		要		0	л	18	做	夫
0	₹ī	睑	25.	95		R	æ	克	84			tli	*	時	94
0	盘	8	聘	失	0	PG	æ	第一	A.			爱	18	46	夫
0	20	25	饭	-		料	H	等	23						
	žn	156	12	es.		\$65	睑	÷	折						

1994.12 No.79 岡田益吉会長挨拶

UGD、便至なクリティシズム

日本発生を等学会によれて、いくつかの発展の限をとって参りましたが、1965年はまた
1度ステップを上さことになります。正江海泉、長濱等華泉、黒編集主幹のご勢力と、運営委 用、食料のご協力により設定されたDGDの刊行をBustweitに乗るされず、いといよ1月よ
現本等組織権を持っている発生物等の労働の協定としてこれまでも表現のの研究をひこの対 になりままれる遅くをおいたのもります。人の日は日本発生が全分の機能ならと同時に、 根本等組織権を持っている発生物等分別の協定としてこれまでも表現のの研究者のこの対 がたいする実現を財に発信するようで大きる党領を採りて参りました。こり広いサーキュレイ 也かり刊行されるようになれば、いくばくかの客ぐる課題も加かって、より広いサーキュレイ ロンが得られて毎月の高文だよりまりで研究的目によるようになるのではいかと考え ております。また、歴代会社を悩ませてきた学会の経済状態も多少は改善されることと期待して じわます。また、歴代会社を悩ませてきた学会の経済状態も多少は改善されることと期待して

1998.12 No.91 竹市雅俊会長挨拶

を表しているのでしょう。ある別の分野の方が、発生に関するシンポジウムを見学され、 その若々しさに驚いておられたことがあります。権威とか伝統とか形式とかやたら重んし る余り、息苦しさを感じる学会がありますが、本学会にそういう傾向がないのはとてもよ いことです。欧米の生物学が進んだ理由の一つは、伝統に最大の敬意をはらいながらも、 同時に、権威に捕われない自由な発想がどんどん試されることだと思います。本学会は 先績を歩むための、そのようなポテンシャルを十分有しているようです。 とはいえ、この学会は現状でたいへん結構と申しているわけではありません。かって、

私が発生学を学び始めたころ(いわゆるembryologyの終焉のころ)、それまでの日本のこ の分野には、それなりに強い個性があったという感じがあります(そもそも、個性豊かな 先生が多かったです)。現在の日本では、むしろそのような個性的研究は明らかに少な 法性が多からだす)。現在の日本では、なしろそのような関性的研究は別らから安全く かました。数い人質の影を関いていて、意識的だめ、たいあさいすることが多い です。これは、情報後の任何的別能、実験手法の均貫化、研究のスピード、研究評価のあ かかた。などによる問題的傾向で、現代が招える文化的な問題の一つでしょう。しかし、 観響勢がどうあうと、扱きってに発酵やらばらりません。それではどうするかし うな話態については、追々、重見を述べさせていただきたいと思います。同時に、是参と

若者よ ―― 10年目の反省に寄せて

とである。というようなことを話したり書かたりしてきた。しかし、この考えには難点が ある。それは、学会と、会員とを図り工味として捕ら入、会員を受け身の立場にの元明 がいるからである。新が、一学会活動の多くは、選条、日の画像、の立のの景像の 会長、編集主幹、何人かの幹事、などの活動によって支えられている。しかし、学会は、こ Lらの人達が、他の会員のお手伝いをするために存在するものでは決してない。30年前に、 発生生物学という学問を発展させたいという強いモティベイションを持った人達が集まっ て、日本発生生物学会が誕生した。この時には、学会が会員のお手伝いをするのではなく、

2015.2 上野直人会長メッセージ

The Association is actively working to communicate the appeal and importance of developmental biology by holding workshops for high school science teachers are delivering lectures by princifying school, and by offering digital images on or well and as on. I finisk it is crucial to do this not just for accountability or as an obligation contribute to society but, regardless of variation training. In communicate that we scientists are enjoying developmental biology and to get young people to sense if On the other hand, it will not be possible to preserve the quality of the discipler will be developed to the scientists. On the other fraint, it will not be possible to preserve the quality of the discipline will only "enjoyment" and "appeal." Critical questions in the session at meetings and friendly competition are also an important tradition of this society.

Now, I would like to call on all members to work together to make JSDB a place that

The control of publishment of the publishment of publishm

2) 和文誌の扱いドゥルて 編集委員会 (岡田主幹) から、現在の発生生物学誌を従来の形式でつぶれるかという。 の破路にあるのではないかという意見が出された。その理由は , イ) 栗生生物学関係の 田識・情報は学会と関係のない人にもかなり強い要ながあり、現在の形のまってけ、それになけ、適切カ 地面・作物では一般に対していまった。 日本企業をある。 浸出でかけます。 では、 古代の は 過かた 場際と がんためへのなかったと思する。 日本企業を寄ります。実際影響や年間以来の係款から が、その中杯の赤たいに・・・上は「容素的なくのは、別の帯で改善機器にできた方がよいので はないか。 岩陰で学る機として出した単行本のようなものが着ましいのではないか。 との 問題については、合質・金組との優かりもあり、より計画を含むてもられるで称文法を異 問題については、合質・金組との優かりもあり、より計画を含むてもられるで称文法を異 **企から提案されるものをサーキュラーで報告する予定である。**

1982.12 No.43 加藤淑裕会長挨拶 若い人達が次にくる学問の将来を担う

完穣のところ哀自身、次の世代への仲継ぎの人間であることを心から自覚し、"何か"を決 へ伝えることを真面目に努力さえすれば、若い人達が次に来る学問の将来を担い見事に関右 させてくれると信じて努めてまいりました。今でもこの信条は私の生き方の支えですし、本学会 9来たるべき次の発展に対して、全力を投じて"仲継ぎ"の役割を果したいと思っております。 着みてみますと、今までの発生生物学の歴史の中で今の様に、この分野が世間一般の関心を いる時代はないように思われます。このことは、好むと好まざるにかかわらず、事実とし とめ、むしろ世間の関心をより正しい学問の発展方向に指向させることが本学会の現在 の大きな責務と考えます。発生生物学史上、始めて発生生物学の技術の有効性が深い関心

一つの大な覚醒さなとます。現金元参学と上、彼りて発生参考の技術の有効性が深い弱らず たれ、またその有効性を実施しつかるこのが現在であると行じます。 未学会は、毎の間違の男の学えとの報告と選択しては、よりままの活動を整めて傾的される 時期に来ております。数年期にして、間間発生性から会社の利用国人指点性を始めたして、 機参の間間の原因と比めて「基本と関すして「する学会が記述のあられますことは、まことにく 強い表現、考えております。

1984.8 No.48大会に参加して 夢をはぐくむ子供らしさ

ただ、このような青い空と、一定のタオリティーを保った研究発表と、感況の数類会と、並べ ただ、このような物、空と、一定のタイリア、一を使った研究表を、高級の影響会と、基本 なたねま知識ないたい。他は本学のウェルの特別が入れるからで、この大会もまた、出会 大会の経験したある他の次等感をまながれるものではなかったように思う。私自考まだこの次等 感の実体を一分を一般では、ないまない。 他に握する事かなた他ができゃくなってきます。立ていまない。 であるうか。大勢の仲間の活まりながらた。よと私はが、「空間的な集りでありなから夢々はくく な子供的、こと大力で、活りはしたいどろうか。研究を実物が、ペードルでなからかない。 などからから、対象の中間の活まりながら、研究を実物が、ペードルでなからかなるがありまなが、 なったからかがありまた。 9分たもの仲間さえ締め出すような雰囲気をかもすのであれば、それは不幸なことだと思う。 てはじめて、複雑を極める生物現象に立ち向う人間の集団として、学会本来の姿に近づき得る

1986.12 No.55 安增郁夫会長挨拶 学会の財政再建を、、

感ずる程の探別な財政危機状態になっております。この財政危機は一に今年度の驚くべき円高に って持たらされたものです。このために、DGDの海外領市に伴り収入が、その販売部数が増 しているにもかかわらず、通年で約30%の減小を見ました。本学会は会員数が比較的少ないと 中せましょうが、DGDという優れた、そして「大きな」Journal を持っている事が特徴です。 のためDGD販売による収入依存率は極めて高く、30%強になっておりました。しかし現在の レートで社これは20~25%にまで低下致し、当然企取入も減少を見ております。との事はDG の選外頒布が多い事を示すわけですかちある意味では誇る事かも知れませんが、実際には62年 Dの最終途前が多い場を示すわけですからある意味では渡る事から別れずせんが、実際には02年 発金付は、特別が主要なりでは、全方なかれる途が予算ななり電射が高いた。思われま す、そのため62年度には、特別会が一場会計を必要なか事も不可能となりましょう。このよう が放放後地は、つから全を経過させることは開催して間間とわければなりません。 私にあたた られた任務の第1はこの財政の再算にあります。そのためにはむしる難論的にDGDの質的な完

DGD、健全なクリティシズム

さて、世の中に致ある学会の中で、発生生物学会は、もっともカジュアルな雰囲気を持 いた学会だと思います。私は、この雰囲気が非常に好きで、この学会に愛着を感じる理由)一つです。これは、発生生物学が、若い人達にとってたいへ人魅力ある分野であること

うる新聞いついては、追へ、重見を述べるせていたださなかと思います。即時に、泉来と あ、若い方かの最大和関して、まだ、正知の意能を実施して、この労金を協力 ことができればよいと考えています。私の、この学金と同様する当面の重要女化事は、 2001年間間の国際発生生物学会の準備です。この金をできるだけ有意成とかにするため、 には、日本から帰りるる自労収息を、かるをだけ買のかんのはすることがより、 それによりお助が、日本で間地の過度間、実質的な価値がせしるでしょう。「外間の有名 な人」の語を関してけの会にはしたくありません。湯外の人をにとって、わざわざ日本に 成を運ぶメリットがあるような、そういう会にしなければをりません。そうなれば、日本 の発生生学の国際的な地質は、一層高まるでしょう。そのためには、刻添、若さまのご 協力が必要です。

1998.12 No.90

「大会の開催は若い人が中心となってやるようにして欲しい」、茶年の代表と思っていた 運営委員の一人の発言を開いて、初めは少し面食らったが、ややああって、これこそ気が 無意識に待ち続けていた言葉であると気づいた。 中略

学会の機能の一つは、会員の研究活動が活発に、滑らかに行われるようにお手伝いするこ

。 では、今はどうか。いくつかの分野の研究の発展には、優れた若手の力が頼もしく認 られる。2001年に京都で開催されることになった国際発生生物学会には、多数の若者が 参加して、優れた研究を発表してくれることを確信している。一方、学会と会員の関係は 、人が何かをしてくれるのを待っていないで、自らの研究を進展させるために最適の環 つくるためには何が必要か。日本国は、また学会は何をすべきか。考えて、行動して

Now. I would like to call on all members to work together to make JSDB a place has none again fosters a culture in which people are able to epily solence in an intense atmosphere. We board members share this objective and will ensure that this will happen gradually. I invite you to see the changes in the annual meeting to be held this year in Tsukube (Hriosth Wads, Chaih, the annual meeting to be held next year in Kumamoto (Akra Nakamura, Chair), and the following meetings. In addition, thanks to the cooperation of many of our members, we have provided the "Summer Symposium" and "Autumn Symposium" as places for young researcher organized to make the properties of the pr

such as UK and France. Some JSDB members were positive but others were not, particularly about holding our annual meetings in English. However, I think it is because of these pioneering efforts that JSDB loday is recognized as one of leading academic societies that is open to the international community and I will inher the initiatives of our past presidents. I think that globalization is of crucial importance, not catch up with Europe and the United States, but rather to show the unique ideas and approaches of the developmental biology in Japan to other countries. I plan to continue to pursue globalization while considering the real advantages to our members. From September 11th through the 14th of the year, the Asia-Pacific Developmental Biology Newton (APDBN), which JSDB jalyed a major role in actsibilishing, will hold a meeting in China (Xian). Details will be posted on our webs in the near future, and I hope that many members will attend.

1997.12 No.88 10年目の反省へ向けて 学会の運営と事務局組織のあり方(岡田(益)会長、浅島)

5. 世界の発生生物学の現状と課題(竹市、上野)

6. これからの発生生物学はどこにゆくのか(1) 今の潜伝子解析を主としたテクノロジーの流れは先が見えてきたか (阿形)

(3) 残された大きな発生生物学の課題とは (岡田(節)、近藤(寿)、八杉、高橋(三))

8 研究環境の改美と研究費の確保について(安部 古甲)

次の10年に解散に向けて歩む、、、

の先は見えてきたか、(2) 多様性の発生生物学、(3) 残された課題 について問う等と ・アルルな人とでより、ソットはアルエナのア、1の 人など、100 ケモ・カットと ウ料金主義的者とくは接進的発起は不快。学会が力を持って、その分野の学問に指針を 5-とリードするが如き不遜には反対。接言すると、組織の為とこの類に真面目になりすざ とと、いつもおかしなことが生まれてくる。組織性落の遊は、善意からの真面目さにしば しば包まれており、組織は場所だけ提供して個々人の後ろになるべく見えないにこした。

学会が個々の研究グループではできない、(1) 生物資源を集め、変異体を作り、保存 ナコジョンのポス・アースによっています。 記者するセンターを作れ、(2) アマズでもsluringに加速pensicを達めた。(3) 各種動物 ついてゲノムプロジェクトを進めよ、(4) 意義のある博物館を作れ、等々に積極的に取り 組むことは良い。我が国の評価乏しきグラントも含めた研究体制の改革に積極的であるの も良い。しかし、学問研究それ自体の生き死には個々の研究者に委ねるより他はなく、 もそもそれが生物学の心。他ならぬ発生生物学会が、多少日があたってきたらといって 生物学の心に対感となるとは解析相い。この一緒に強感になると、日本の学界でなるべく 経習対をますため助選学会と協力してだれそれを?すと返り込むう、科研費の配分をとう うしよう。はている大は重ねの参考を、学問をおりかしてやまない語彙等の開始が直 な必然。その形あり。majorでなくともよく、農協の道と振力施輸であることを発生生物 学会は誇りとすべし。この観点で学会が創設から最も考えるべきは、学会を解散する時、 数り際。解散し損なったしょうもない諸学会の末路の醜さを見よ。発生生物学は今や、発

世界の発生生物学の現状と課題

細かいことに多くの時間を費やさざるを得ず、研究のロマンなどどこかへ吹っ飛んでしま いがちです。最近の発生生物学の論文の多くが正直言ってなんとなく 'exciting "でな アルドル・ストーのでは、アルト・ストーのでは、アルト・ストーのでは、アンカーには、ア ん。しかし、テクノロジーが駆使できない地味な難問に取り組んだ論文は、多くの場合 こんに記載的とされ、いくら斬新なアイディアが提案されていても、高い評価は受けにく ものです。これはある意味で残念なことです。このようなある種の不公平感を感じる現

の研究は、実に崖しい。自分の研究を現代の水準に合わせることは最低限、必要ですか そこで止まる研究が多いことは残念です。流れに添っただけの研究から突出するものが生 まれるはずもなく、上のような状況をうまくこなしつつも一方で個人個人が秘かに独自の イディアを育てて、学界に挑戦したいものです。流行を堂々と無視できる研究こそが 新たな潮流を作ることができるはずです。

1991.12 No.70 英文要旨の発行停止は

サーキュラーの砂がにてた加藤労生さんによる登場は、おか労会の「危他か成下していく"! と いう、あっと響くイトルで、簡単は変化の学会グラストラド(以下突炎が登せる"の発行を やめたことが、(研究の間原化から取り残され、Dいては本学会が衰退していく』かもしれない という危険を表明されているものと私は理解しました。DGDから労火選挙を省くとを決破し たいなた延載を基準っただきの数でから、まさめての歴化が余の部性気でや、関係化の低下を 据く国作用があるうとは、想象もせぬことでしたし、加廉さんの配準に接した今でもまだ。その 「危惧」についての実感はありません。以下に私の意見を書きます。なおこの小文で〔 〕はカ pmc ルルビル中からの引用です。 中略 加廉さんが合わせて 4 回言及されている「國際的/国際化」については、学会としていずれれ

飲酎を迫られるもっと本質的なことが別にあると私は思います。それは、日本語のできない会員 か国が宇宙外で増加したさまた。ローカルなは不香港の学会として、とんな対象ができるかです (実際後のサーカーラー学・講演計論は実際にする?)。同場の実際さくに学会対象の貨割)を 考えたち、背部障壁をもつ故にローカルであるこの間で、学会演習の「国際化」の途は、(資業 り甘い響きとは裏腹に)そり簡単ではないと思っております。

お子伝いする所存でございます。これまで湯り会員数の前、現場会見、広告主の地面やは基礎に に進めようと思っております。また、年3回及行されますインフォーメーション・サーキュラーに 関しましても会員同士の情報・意見交換のためのサロンとして、これまでと同様光度させていきた と考えております。つきましては学会に対する提言、研究雑感、トピック、新しい研究手法の# 、学会の見聞記、関連集会案内、書評等どのような内容でも結構ですので是非事務局にお寄せ 1、アスアルのMine Manace ARTA manye でくる / ないれても相談 、アグリを不中が利しる力で 5い。私共の至らなさのために多々ご迷惑をおかけすることがあるかと存じますが,会員の皆様 複様的なご協力のもとに何とか責任を果たしたいと考えておりますので,ご協力の程心よりお願 (します。なお、庶務幹事と会計幹事はそれぞれ当研究部門の田中実、吉国通庸間氏にお願いし 町えて雑務に関して野田喜久代さんにもお願い致しました。会員の皆様、2年間どうぞよろしく 願い致します。

2011 BBS投稿から

ボジウムには必ず一定枠ショートトーワーで必要体からあなが遠ばれるようにしないと 会員にとって大会の趣味が、。と思います らがでポスター級という時間があってもいいと思います。 また告問年名、相手からの希望もあることと思いますが、同日も選ばれている人が目立ち またも同年名、相手からの希望もあることと思いますが、同日も選ばれている人が目立ち ます。そんなに人科服」形ではなく、また書もからこそ各位と自用年会となったのではな いでしょうか、もっというよいらな人に順名を与えられないでしょうか。それとも台同年会 と称してまずがみの機能でいってることなのでい。ようか。それとも台同年会

2011 1 阿形会長批判に答える

む

Information Circular (No.で表示) を中心とした過去の文献から会員 が何を思い、活動を続けてきたか を読んでみました。 元の文章から一部を抜き出してい ます。時間のあるときに、オリジナ ルの文献を読んでください。 発生生物学会のWeb siteにア カイブされています。

1971 1No 7 和文誌を廃止 会員以外も読める出版物の提案

学会という組織は、必ずしも大きければ大きい程。その意義を果している。というようなもの でもありますまい。 本学会についていえば、近い将米にその競機を現在の2倍にも3倍にも大き くすることを特に目標としてかかげる必要はないと思います。 しかしながら,発生生物学のカイ する研究領域についての世界的状勢―そのすさまじい中ぴ―をみれば、本学会としてもいま。 歩、学際性と国際性を広めるべきではないかと私考します。この方向への発展について、広報 動その他による努力をしたいと考えておりますが、会員徴氏にも、しかるべき方々へ(日本人 外国人)本学会を紹介されて、会員として加わって頂くよう、或は、DGDへの寄稿を示しし 頂くなど、機会があれば留意下されば幸です。 R、A.C.、 MRXがあれれ出版トされれずとり。 学会の活動は、要は各会員の研究活動に負うておるのでありますから、本学会が過去、学問的

1979.3 No.32 岡田節人会長挨拶

学会という組織は、、

に営に一定の水準を維持することに成功しており、その事実は国際的にも一応の(残念ながら) 分にとはいえなくも)定籍した評価を得てきたことは、じつに喜ばしいことであります。そして 換言すれば、会員の多くの方々が「出席した値打ちがあった」と感じて頂ける大会が開催でき、 限国すれば、会員の多くの方々か、山原にに適用しかめった」と思いて加って水戸中間であ 多くの方から、「原境化でよかった」と思いて加けら雑誌を費用していくことと表が多合の目標 でありましょう。そのためにも、ケータの学館と原理的の間所への努力を挟えないと思います。 本学会は、写会の理能、学会行等への発言と参加といった回れ、つる自選に呼吸が 会に比べてはさんで高いのではないか。という印象をかねがは取れ受けてきました。選者を具 かの認識なども異物な際に努力を学ったあります。会社をしては、これが心強いことはないと思 つております。今後、会員部だの本学会の選集、将来について首時強重のない意見、地質を著 せて頂くよう事類いします。

1989.8 No.63 みんなと同じこと

関 田 益 吉 (筑波大学生物科学) 今回は狙いの明らかに分かる発表が多かった。と述べた。これは最近の傾向であり、大姿地 今回は親いの男ちかに分かる発送が多かった。と述べた。これは数式の傾向であり、大変機能 なことではある。しかし、これはまた分子化、選択子化の無米でもあろうかと思う。何故なめ、 原他、銀空子現象の回顧機能を得べるために、その選択子がか、中心化まれていると思う。 であり、分子としての選出子の原温的特徴。それと他的でもタック・男の原理など、必要な情報 であり、分子としての選出子の原温的特徴。それと他的でもタック・男の原理など、必要な情報 を含っために利用し得る技術に異恋のところそれはど多様にわた。てはいない。そのために、今 分とその意りのスタイドがでくるし、これは多ケツモーターの人工的次交換施度がなと思 うとその意りのスタイドがでくるし、これは多ケツモーターの人工的次交換施度がなと思 うと、これまたその事、都確いいまば、脚部を見ただけた場合があり、十人の什么を記 子は基ってもやっていることは同じ、というような状態になりかわない。このような状態は特別 の意から遊覧でしばしば起こってきたことであり、必要なことであって、思えばらも空間から存 としているとかではない。もじた、大多の人が展行後、学の場ではは、今の異像の中には、その しているわけではない。むしろ、大勢の人が流行に乗って研究すれば、その集積の中から重 事実が明らかになってくることは期待出来るであろう。しかし、われわれ生物学者は、ただ こそこに遺伝子があるからそれを研究するという態度は、出来るだけとりたくないものである。 今大会を見る限り、発生生物学会で発表される研究には、生き物の臭いを強く残しながら、 に分子化が進んでいることが感じられ、大変頼もしく思った次策である。まず現象があって その分子的な仕組みを明らかにすることを目指し、そのために必要な技術は積極的に取り入れ 用し、あるいは自ら開発する。しかし分子機構を示すスライドの背景には、常に生きている ミやショウジョウバエの胚が透視できる。発生生物学会はそのような学会であり続けて欲し と、私は願っている。

吉 田 昭 広(上智大・生命経) 大金殖表は3日間を通じて、クローニング、ブロッティング、モノクローナル抗体、等の分 へ会が成れるよりがなねとい、 地帯が大きな場合に表現を決した、例が交い、それら下圧調されるような印象であった。発生影響が 迷海が太明的に実際する傾向であるうと思うし、現在のところ遅れ軽く道程子もよく扱ってい、 「乗者も、研究の今後のステップとして、近いうちに分子レベルでの解析に関ふ込みたいとい。」 思いを、いっそう強くさせられる。早くそうしたいという気勢をにあられる一方。また、以解し、 人から言われたような「みんなと同じことをしていないことによる不安」を抑えておく必要 スかもしれない。なにより,自分の研究の必然的ステップを踏みしめながら分子レベルの解析 に進んでいくのが理想であって、実りも多いと思う。筆者の行っているパターン彩簡形成の分 こも、手法が面白い、または現代の最先端のものであるけれども、実質的な進展は少ないと第5 には感じられるものを見かけることもある。

1990.8 No.66 大会での議論の盛り上がり

発生生物学会では、以前から院生を中心とした若い人からの発言が多く良いことだと思って が、年々、年長の先生方の発言が少なくなっているのではないかという気がする。また今回 このセッションに出ていただけたらと思う何人かの先生がいらっしゃらなかったのが残念な気だ した。 権人の事はよくわからないけれども、誰しもこの人には是赤とも自分の仕事の話を聴い らいたい、というような人が一人二人はいるのではないかと思う。一般に自分の仕事の話を融 てもらい、comment とか suggestion をもらうのは有難いことであるし、とくに自分なりに 仕事を始めた者にとっては、そのような人から意見が聴ければ願みにさえなろうというものでき s。年会は、そのような interaction を持てる数少ない機会の1つであることを想えば、おこ ましい言い方かも知れないが、年長の先生方のさらに積極的な参加。発言をお願いしたい。 方、団先生が元気なお姿を見せてくださったことは、素疸にうれしく思った。)

佐々木 洋(東北大・抗酸菌研・細胞生物)

仏水木 序(単た)、対策関手、細胞生物 しかしたがら、今久舎を全体を選して私たときにそれはど場合であったという開発が構い。そ れおど場合であったという開発がない環境は、おそりく、発度の開閉ななりのがかないというこ とではなく、発度は守ち討論があまり限く行なわれなかったところにあるも思われる。発起い は、即称で質別が出て、合物を木を買加から上がりとてもなってが関係を付きされた。それとい た発表が最えらはとしかなく、各実後、ややあってから質問が出て、長臭の問題を付きされてい たを入取るようはとしかなく、各実後、ややあってから質問が出て、長臭の問題を付きされてい インと質問が出て時間があるといった場合が多かったよりながから、反注関くところによれ くっておりた。その様とついては、名の相を関すくここので制御)ます側の学者と振りたないとうか でなわずる。ではない。対象的を対象しているの。後して、後を対象が指金値しないとうか ではないだろう。主な説明は二つあると思う。ひとつは、全員が増え上すたために、金負間のつ なかりが得くなり、その様に、対象があると、然とのの様、生まが言いてくくなったとさいある たかりが得くなり、その様に、対象があると、またないとない。

硬直化した学会は魅力を失う

取ご担しした子工は砂心力で大くされる。 よもも、今まりは素にするでもなく、学会は好学者の組織であります。一方、人間の 施は、それが何を目的とするものであた。一般に、したいに乗げ合けるもののようであります。 研究性はとより入所でありますから、学金にもよの実施が低でます。 研究の動句そのものけ 身を利力を変せを受けていて、それを表とする研究の自動は、一変姿音でもとったが ティーを失って展展化して行くようです。これは大いなる手帯であります。 硬値化した学会は表 力を欠い、残酷の名前を全を書からなことはできません。 免急生物学会か現底とした大阪地になったいるかについては、会員各位が最も良くご各知ではない いかと考えます。 裏の一番の際には、発生生物学会を実現に発生研究者の契値的報信として、 定然的が維持さるとであります。 それに、毎日の書の、一人の保険的など、は、

いたと考えます。我の一番の際には、発生地等学金を成果に発生研究性の環境物態として、 常年販力を開かることであります。本科学研究性の選集、研究の他会化、学会機能の関係的止等。 今後、貨能工作組織でいたおは少なない学会としての課題に同様したあります。これらの課題 の場理と計算くものでないことは目明さめますか。 会員各のご助びよって、多会を立場 の心器を含れることなく、似の在任中に未会の部分を少しても保上し、それに等与できることを 原便に、関かれた学会であるという本学会の美術を最大限に添わしていただき、学会の健全な 環接に、関かれた学会であるという本学会の美術を最大限に添わしていただき、学会の健全な 環接し、例かれた学会であるという本学会の美術を最大限に添わしていただき、学会の健全な 発展のために、会員会位が常り国際施的に工業言できることを切に望みます。

1995.8 No.81 学会に参加して得られるもの 駆路工大・理・生命 阿形清和

超貴工大・理・生命 阿邦特和 起は良らく学会というものは、単に「発表をする」「発表を同く」だけでなく「発表 継に、できるだけ本質に迫る脳論をする技を修く」場だと思っていた。それは、私が知 で参加した学会が発生生物学会だったからであり、それからしばらくは発生生物学会が の学会に参加したことがなかったたかであった。しかし、他の学会と添加するようにな てわかったことは、一般に学会というものは「発表をする」「発表を聞く」の2つの要素 よって成り立っていることだった。そして、もうひとつわかったことは、みんなが「発表 を種に、できるだけ本質に迫る議論をする技を磨いている」、そんな雰囲気の伝わって る学会のほうがおもしろいとことだった。 発表の細かいことにこだわるのではなく、その研究発表で知りたい問題点の本質にい

そこで、今回いろんな動物の in situ hybridizationのパターンを断片的に頭に入れ 帰るだけでなく、発生生物学会らしく一歩踏み込んで in situ hybridizationのパタ 得るだけでなく、発生無常等をしく一場解み込んでin situ hybridi cationのパターの から免を議論さつークショップをトライレでみたのである。 特は「後妻する場合の 関への一方通行〉ではなく〈発表する様と明く側の双方向コミュニケーション〉を復活さ せることに重点を覆いて、発表する様からいくつかの点をだしてもらい、別で個が議論 なが点と広を結ぶ作業すするという前代末期の終みをしてみたのである。この大胆な 試みが、思惑題りまで行かなかったことは松頃にのコメント文を展入で面ければよく かると思われる。大胆なアークショップをアレンジしたにもかからかず、私本人の力能 機能付わたかる。かたい同様が存むはキャンプェックトと呼ばれます。 準備がたりなかったために消化不良に終わってしまったことは悔やまれる。あまりにも; が設定した点と点が離れすぎていたことが一番の原因であり、点と点を結ぶ作業をする はまだ情報が少なすぎたということになる。

私が発生生物学会に期待していること、すなわち、発生生物学会が単なる「発表をす あるいは聞く」場ではなく「発表を種に、できるだけ本質に迫る議論をする技を磨く」 としての面白味を保つためには今後ともワークショップをうまく利用することが重要な

2003 浅鳥誠会長メッセージ

イントではないかと思っている。

The Japan Society of Developmental Biologists has a long history, but the fact that younger members freely and actively debate and discuss various issues is one of our people historycaterists.

The Japan Society of Developmental Biologists is also presenting to the world the research journal "Development, Growth and Differentiation" (DGD). In January, 2004 Professor Statio Yeasagi of the Toply Bethorghlein University Bock over as editor in chief of this project and we are already articipating sept things of this journal. Factors contributing to its increased regulation as a journal are not only limited to take increasing impact factor to take to a special calculators of our papers. members' submissions that were of most benefit to us. I would like our membe actively submit to DOD. Under the present editor in chief the ability to receive submissions electronically is currently being arranged. By turning to color and electronic submissions I feel that from now DGD will have considerable global growth. However, I am aiready confident that this journal is a quality one due to individual contributions of our members.

2007.9 相澤慎一会長メッセージ

振り返ってみれば発生生物学は今、内からも外からも大きな終日を迎えていると 思います。かつて採ればいか上の舞をみてその前点と心を触せつっ、山の礁の一分。 生命の心態でに最大に、しかしての15 ち年間の地に入れて展れなけって建からから 高色には全ってしまった起かめります。この間違率は小に日本の非生行界の国際のか 様には、繋付なれて必る自然をもっていして思います。かい大の前点は大変わってきます。 首に少年上にみえるわけではありません。裏の果えがはされぞれに変わってきます。 し、かつてのように心臓できぎではないことうもあると思います。発生分野に振っ し、かつてのように心臓できぎではないこころもあると思います。発生分野に振っ し、かつくのように心地でも会てはないことっちめると思います。 光生分野小原? てのことではないでしょうが、上の世代に伍し種えようとする35前後の苦い人の 汗とかけ声が、普でのようによく見え、響いてこないところがあります。このよう な発生生物学の流れは、発生生物学会の流れでもあらざるを得ません。折から我か

1979.5 特別号

1,学会活動に関する事項

の検討が望まれる。

10年目の反省 日本発生生物学会発足 / 0 年目の反省に基づく学会への提言

日本発生生物学会会則の定めるととろにしたがつて、運営委員会の発騰により本会 のより良き発展を類して、10年目の反省について一昨年来綺騰を重れて動りました 〈インホメーション・サーキユラー、29一 31号)。広く会員の方々の意見をとり

・今命的知に何ナる専項 (1-12) 運営委員会の改動について 本会の信頼は運営委員会のなわ方に大き(依存している。しかし、現在の運営委員 出版はこるかまり、どうしても選挙委員が固定にし、学会信節の進分が大なわれ いくかそれがある。最生他等で展立を挙じるが明ら来る物界を自由を受け けたなたも、新しルラーマナ南心性化の研究者が運営委員会に参加できるよう、運 環風推進を受けてきてある。 (1-2) 研究文徴の復進について

(1一4) 数次線の刊行べついて 本会の信節の主要を住の一次、数文線、D G D で刊行がある。本結は編集委員各 他の参方なよって、現在では、年間の号を刊行できるまでを開送し、国際的評価も急 設定高まりつつきる。しかし一方では、会賃負加が値学会に比べて大きいとの声も会 員の間に高い。会員の経防負担の電域を引る意味で、数文値のより有効を刊行方法

2、平金が中心となるかるかけ支援して重要が不事項 (2-1) IUB S可能についる 本金は、現在もなおIUB S 所派に組織化されていない。国際的にはセレろより活 及立活動をおこなつていると思われるにもかからが、現在は細胞生物学会研進の異化化量がれている。IUB S 研練体発生生物学研進を組織すべきかどうかについて、

(1 年級が、いくの。) 1 の対策と、共主、中で加重を観測 「あたっとうが入って、 (2 ー 3) 発生生物を再進研究の「特定研究」の組織化だいいて 現在の解解化で、発生地等での研究部ととって、研究費の確定がきわかて開業で ある。発生生物学に関係の部が新しいテーマを開始的としまって、効果的か工機板 (1 作者定研究の単常かととまえまうな機能の実施があるを)を消費 (2 まれている。 1979年5月10日 江口吾郎

1985.7 No.51 一般発表を全てポスターに - 散発表をすべてポスターとしたのは、実に簡単な算術の問題から出発している。昨年の熊木。 E年の松山とも、一般発表は約120頭、これを誘旗製式で質問時間を含め1類20分とすると。 会場3日間を殆んど想めて余り余裕がでない。もしも儒本や松山よりも交通に復利な名古歴で 会を行なえば、講演隠数は恐らく2両増くらいを覚悟せおばならないだろう。そうするとシン ☆会行なたは、海回撮影は恐らく2期間くらいを貨幣をおけならないべたりか。そうするとシップ けつか、リーテリン・ブルとを得るが、一部ためいの影響が響を終してか、あるいらながら /用やすか以外にはない。これは、いずれもやりたくないと思った。大楽頭にいえば、発生生物 ☆の大点のもり方の影響にかかわると思ったのできる。そして、そのは7世一の解除限は、ボ リー・型次の大端隔入であった。ボメラーが解除にからりの手間を負い、計ち返びによれている り、質問時間の居られた溶解感式とは異なり、自分の知りない。近をリードン等ねることができる いつ大きなメリットを持つている。ボメラーを凝入することにより、毎日は下後からという前 の次面響が無りが無くかは「リートで」。 メルターを凝入することにより、毎日は下後からという前 (小の変響を用の原因をより間)、キャウ・エー・プロからない 見が回答の前にありまり。 ドの運営委での斜接目を実現し、またワータショップのほかに特別構装の時間も作り出すことが できた。ポスター亜式と講演型式にはそれぞれ,一受一短があり,その得失は一様にはいえない と思うが、当学会の発展型式としては、あわせて御検討願いたいと思っている。高蛇足ながら

ポスターの上手なデイスプレイの工夫や、質問者が特定の発表者を長時間独占しないなどの、ポ

スターセッションをより効果的にする工夫も必要と思うが、これは回を重ねることによって自然

りとき考えたからだ。 ンとさずれたから」。 大会当日のポスターセッションの,まるでが祭りのような腰わいには難いた。参会者の寄さん 成功している。一方、参加する傾からは、細かい点では倒えば与えられるパネルが何色であるか と問題なも数人のポスターの演者遊と、まことに詳しく、しつこく、かつ歌しく話をかわす融会 というようなことも含めて、若干の前線不足から展示の効果についての不安を予めもった談者も と得た。初回にも関わらず、ポスターガ式の抱着のメリットが十分に生かされたというべきであ いたに違いない。とはいえ、1日目の年後いざ泉示が始まると、たちまもそこここに人振ができ ろう。旗朋を出さなかった参会者も、例年のよりに貼って発表を聞くのでなく、施書庫との今ែ 上って活発な質疑が自然に交され。熱気があふれたのはさすがであった。 を通じて、まさしく学会に参加したという気分をもったにもがいない。

ビガギ祭りがすみ、研究室にもどってから怠はふっと気づいた。ことしの大会では、何としば まずポスター展示の場合は削強に参加せぬ視聴者という立場は殆んど意味がたく、また服られる 」に各党の仕事や、わけ知りの相呼とばかりつき合っていたことか。未知の人趣。未知の分響の 時間内によく理解しようとすれば、その研究に関しては introduction を不要えする程度の予習 ことを何と少ししか学ばずに帰ったのか。何しろ1セッション当り22個のポスターを被みとかせ が望ましいこと。つぎに30の展示が3会場で同時満行している状況にあっては、特定の展示に長 5わけがない、まるで32の会場を2時間単でまわるようなものじゃないか、これは含き手の側の 雪い分であろう。だがポスターの報者にはオブションはなく、他の31のポスターをみるために席 を外すわけにもいかず、しかも場合によっては客がひとりもつかないことだってある。知名度が

1995.8 No.31現状スタイルの大会は困難

名古屋大·理·分子生物 藤澤 肇 ところで、大会選営を実際にやって見て、また、今後の大会の姿を予測したとき気にな 。ことがあります。それは、発生生物学会大会の規模が年々大きくなってきており、現状)スタイルで大会を開催することが次第に困難となるのではないかという点です。今大会 では演題が昨年度の大会に比べ48題の増加(22%)となっています。また、会員数がこの 1で1期位の増加となっています。この傾向はおそらく会後も終くのではないかと思わり (Fr. Linne、2018年)、 (中国・1985年)、 (中国・1985年 2分野の大会では3日間で2会場制が大変有効であると思えます。ポスター発表を増やせば いいとも考えられますが、実際に大会を選常してみて、ポスター発表はポスターボード賞 現代金をとで大乗お金がかかり、更に、広いポスター展示場の確保が容易でないことを知 ました。地域によっては、今全なもいの規模の金融を称するのは関係が基合もある と思われます。その二つは、今年度の大会の規模くらいが少数の準備委員で手作りで準備、 運営できる限界ではないかと思えることです。

1996.8 No.84 学会の「暖かさと情熱と怖さ」

北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻 栃 内 小さな学会は家族的雰囲気という温もりだけを持っているわけではない、私のもうー のメイン学会である「大きな」動物学会と比べて、発生生物学会は発表するのには「恐い」 学会でもあった。発表に対する質問の数の多さとその学問的競さのために、しっかりと準 着されたデータを持って出て行かないと許されないというような雰囲気が感じられたもの である。聴衆の平均的学問レベルが高いということのほかに、専門分野の少々の違いを乗 越えての興味をぶつけられることも多く、そこに小さな学会特有の熱気が感じられた。 である。発生学に関係することであるならば多少の分野の違いなどはぜんぜん気にしな で討論しあうという、ある意味では学会あるいは学問分野の未熟さ故の貪欲さでもあっ のだろうか。それが近端、この学会の持っていた「暖かさと情熱と衝さ」が減ってきた くなってきたことの影響が確かにあるだろう。というのが今の私の率直な感想である。

動物の発生過程における循環域の果す役割は大きい。細胞間相互作用によって細胞同志がその 発生適命や分化過程に影響を及ばしありためと考えられる。第18回の発生生物学会大会も学会員 という細胞が集まり、学問的に影響しあうのに好適な微環境をつくったといえる。その主たるB 因は言うまでもなく発表形式をこれまでの一方的な口抜からポスター中心にしたためであろう。 これによって会場全体が議論の熱気にあふれ、とかく「すまし顔」だった学会発表が実に人間臭 い event となった。お互いに研究内容が近ければ近い程,ポスターのデータを目の前にして実験 条件や技術などについての細かい議論ができたし、畑の異なる研究に対しては、口族形式では異 難するようなごく初歩的質問もすることができた。また、そのような質問も受けた。概して、そ のような質問の中に研究に対する励ましや、時として確認な裁判がふくまれていることがある。 また各人が自分の仕事に対する世人の関心度を構で知ることができる(もっとも流行と学問はオ 来無関係であるが、公費で研究をしている限り無視することはできないだろう)。さらに議論は 発表内容に関することから研究費の問題や、大学と研究所との研究態度の相違といった話題にも エスカレート(?)することもあった。これら全てがポスターを前にして行なわれたのだから書

の振りでは、昨年とほぼ同数の一般講演を実質1日半で消化できたところにもみられるように、

加者同志の相互作用も大したものであった。その他細かいことを書けば、

とうして実際に討議に加わってみると、参加者に求められる要件のいくつかがわかってきた。 くかかわり過ぎると他への参加が不可能になり、多くの展示にあたろうとすればかなり意識的な 自己調整が必要であること。私私自身についていえば、この調整がうまくできなかったためいさ さかのフラストレーションが得ってしまった。ともあれ、これらはいずれも口頭発表を聴くの くらべてわれわれに主体的参加を要求するものであって、それが上述の"疲れ"を感じさせたの であろう。もうひとつの問題点は、同じ時間帯に展示を行っている発表者と直接對論するチャン スが無いことであり、これは互いに近い分野の人が重なる場合が多いだけに具合が悪い。このあ

りが口刺発表と著しく異なるところで、展示をアレンジする翳の技術上の標題といえるだろう。

2011.7 阿形清和会長年頭の挨拶

発生生物学会は何をめざしているのか、 会員は学会をどのように活かしていくのか

世界へとつながるチャンネルを個々の会員 こうかって管理すると、"発生主等学芸伝、団界化こうなのラナヤンネルを含かいかませい 製していくこと、"会員は、世界基本の環境の中で自分を得りていくこと"が、 学会の大名を役割となっていると言える。日本サッカーが、世界のトップチームとの背点 経験する中で、会自は自分達の・世界での立ち信節を経歴し、フロント・サイエンスを 関するよのは、ことを接続し、どこを特別し、とつまり、 している。国内の学会に所属しながら、国際基準の経験を含まりしていけるところが発 ・で物等へかれませった。「いる

がし、前途によるに、「毎のの高が何少の研究界表を通して、例分を軽く進して、 呼音からしている性的が無くなっているために、 会員の中には、学会の中での立ち回面が けっきりしていないからあいのではないかと思かれる。そって、個々の会員が、学会が示 ている研察などションを共有するとともに、学会としても思々の会員へもっと自分の研 を表現できる最後を押すること一の両が重要となる。製造でやることで、ラストレスを解すす 表現できない、国際できないストレスを修りるからしれないが、そのストレスを解すす 気がた目体力量ないし、いの、日本のサイエンスの根末はなり、より多くの会員が、学会 46~46年、からかしている。「最初に、個れる・ことが重要である。 で関節のプレゼンをすることで、異態に、明れることが重要である。 学館の本業・次本の主義 世界を目指す一と言うと日本人は無線配く返りですり、今会の目出しているのは、実態性 によって知識性の別・研究をよりなに使用へ速速させいくことにある。毎年への合同令 合を通じて日本のブリジナルな研究を外へドンドン板がしていく、DODを精確的に活動し 流することを照得している。私のようご監察経験のほい人間は、日本という風質で指面に 清することを照得している。私のようご監察経験のほい人間は、日本という風質で指面で 存実を展開できたいうラフスの間を行っ反応。ながな世界の発生を対象で全角には ディに入ることができなかった思い経験を行っ、即々人の力ではなかなが知らことのでき がい世界のようニティに入る実像、学者が提出している影響は大利、ブリジナリ ティの高い研究をとかどんが開発は交換し、レフェリーとエディターと互角にやりあい ながら、世界人を担くてもらいたい。また、おい合義は、学会を、世界へとつながるチャ ンネルとして積極的に利用して、世界人打って出てもらいたい。

, 子会の連合と事務局組織のあ。 , 大会のあり方 (団、平林) , DGDについて (嶋田、片桐)

4. 日本の発生生物学の現状と課題(相沢、黒岩、中辻)

(1) 学の風は丁香桐を主としたテラノロンーの流れは元か元えとさんか (中市) (2) 限られた生物種を使った分子発生生物学から多様性の発生生物学への展開か (板内、漆原、仲村)

会員会のコミュニケーションのあり方(松田、西田、中島)
 サーキュラー、シンボジウムのあり方

次の10年に解散に向けて歩む、、、 相 沢 慎 - 発生生物学に要素を感じているものの一人として、あえて物議をかもす。本反名検討課 進にあるように、学会が「これからの発生生物学がどこへゆくか」(1) 遺伝子テクノロジ とはない。

「世界の発生生物学の現状と課題」というテーマを与えられました。この種のテーマ

最近の、特に分子生物学を基礎とした生物学における大きな問題のひとつは、方法論や ※起が、ボーガア主要する機能とした主接サーおりなんさな問題のびどつね。力が緩や 情報の世界的な異化でしょう。高次の審査員が、対策化した類でいる場かのことを 要素します。(私もそのような審査員の一人でこれは大きなジレンマです)。実験について 一通りの作法を満足させないと、論文は容易には発表できません。したがって、現実的な

の じゅ。これはめる 思林 に大志 なこと じゅ。このようなめる 他の かぶ十郎を 恋しる 、 どう打破するかが、課題といえば課題でしょうか。 の研究の流れはこうだという会話をよく耳にします。しかし器用に流れに合わせた

学会の活性を低下させるか? * 田 満 樹 サーキュラー69号にでた加藤秀生さんによる記事は、わが学会の〔活性が低下していく?〕と

1993.12 No.76 会員のサロン・サーキュラー

長 高 塞 老 お引き受けした以上微力ではございますが、精一杯会長を助け学会のスムースな運営のため

年期決断で述べたように、会員に自分の研究を終りして議論する機会を与えることが学会
の原点と思っています。美術の目指すところは、個々の表表として、それを発
いりながら、当日日本語でやっていたような法を依頼ができるようにすることです。
現在は、そのための出上開催であり、年間末野でよったように、完らたしてすることです。
現在は、そのための出上開催であり、年間末野でよったように、完らしてきることです。
現在は、そのための出上開催をあり、その上でもないます。
まついる女性をお願いするみあです。今までの温を受責もた、連上開催で指揮してよったけて
まついる女性をお願いするみあです。今までの温を受責もた、連上開催で指揮してよったけて